

令和 6 年 5 月 24 日現在

機関番号：14401

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2023

課題番号：20K00497

研究課題名（和文）未来派演劇における身体性の研究—その抽象化と機械化の意味

研究課題名（英文）A study of physicality in Futurist theatre: its meaning of abstraction and mechanisation

研究代表者

菊池 正和（KIKUCHI, Masakazu）

大阪大学・大学院人文学研究科（外国学専攻、日本学専攻）・教授

研究者番号：30411002

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,300,000 円

研究成果の概要（和文）：未来派の舞台芸術に関する宣言文等の理論的著作や「総合演劇」を中心とする劇作法の綿密な検討から、未来派演劇における身体性の抽象化・機械化とは、同時代の機械信仰や遍在的で相互浸透した時空間の認識に基づき、そうした時代に適応した身体表象への変容を求めた結果であったことを明らかにした。そうした身体表象を獲得するために、交換可能な身体のパーツや機械と共通の言葉、思考や感情の抽象的な可視化が志向されたのである。また、こうした身体表象の志向は、20世紀前半の前衛芸術における奔放な主観の氾濫と反動としての個の否定と事物主義という主観と客観の認識をめぐる問題にも還元できることを指摘した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

未来派の舞台芸術における身体表象の抽象化と機械化が持ち得た意味を、同時代の文明の発展や時空間の認識のもとに解明できたことで、前世紀の前衛芸術運動のみならずヨーロッパの演劇史においても未来派を正当に位置付け、その貢献を主張することができた。また、時代における身体表象の変化といった観点からは、人工知能や仮想現実が発展した現代において、物理的身体の意味や役割の変化、潜在的な可能性について再検討するための示唆を与えたという意味でも、本研究はアクチュアルな社会的意義を持つことになったと言える。

研究成果の概要（英文）：Through a meticulous examination of theoretical works such as manifestos on Futurist stage arts and the dramaturgy centered around "synthetic theater," this study elucidates that the abstraction and mechanization of corporeality in Futurist theater were a result of the era's mechanistic faith and the pervasive, interpenetrative perception of spacetime. These factors necessitated a transformation in bodily representation to align with contemporary times. To achieve such bodily representations, efforts were directed towards the interchangeability of body parts, a shared language with machines, and the abstract visualization of thoughts and emotions. Furthermore, this study identifies that the orientation towards these bodily representations can be traced back to the issues surrounding the perception of subjectivity and objectivity in early 20th-century avant-garde art, marked by the rampant subjectivism and the counter-movement of negating individuality and embracing objectism.

研究分野：イタリア文学

キーワード：未来派 フィリッポ・トンマーゾ・マリネッティ 身体表象 総合演劇 歴史的な前衛

1. 研究開始当初の背景

(1) 20 世紀前半の舞台芸術における身体表象の問題の再提起

まず 1 つ目は、作家の側からの俳優への不信である。19 世紀末にはすでに、アルフレッド・ジャリが俳優にマリオネットとしての演技を要求する戯曲『ユビュ王』(1888)を発表している。俳優は詩人の思想を裏切るという認識のもと、身体表現を記号化することで俳優を人形化しようとしたのである。こうした認識は、俳優は演出家によって完全に操作されるオブジェとなり、舞台を機能させる様々な道具の 1 つとなるべきであるとしたゴードン・クレイグの「俳優＝ユーバーマリオネット」論(1907)や、俳優の演技は必然的にオリジナルに劣る舞台上の翻訳にすぎないと不信を表明し、ドラマの「登場人物」をそのまま舞台に送って俳優たちと対峙させたルイジ・ピランデッロの『作者を探す六人の登場人物』(1921)へと引き継がれていく。

また、俳優の身体表象をめぐる問いかけは、同時代の産業や科学技術の急速な発展からも派生している。機械化に伴う新たな視点や速度の獲得といった従来とは異なる生活環境の中で、新たな知覚を体験しつつあった人間は、それに相応しい芸術の創造を模索し、造形・視覚芸術の分野ではキュビズムや動体写真などを生み出すが、身体を媒介とする舞台芸術にその意識が向けられたとき、摩擦と疑念が生じる。従来の身体性を超克する身体表象は可能なのか、そしてもし可能であるとすれば、それはどのような形態をとるのか、といった問題である。

(2) 未来派演劇における身体性の在り方の探究

創始者フィリッポ・トンマーズ・マリネッティは、1909 年「未来派創立宣言」を発表する直前に、『電気人形』の中で既に人間の精神のグロテスクな分身として「自動人形（＝ロボット）」を登場させている。また、1915 年以降の「総合演劇」においては、機械化の速度やリズムに合わせた身体表現を模索して「同時性」や「空間の浸透性」の劇作法を導入し、人間の感情を俳優にではなく物体に委ねることで「オブジェ・ドラマ」を生み出している。そして、1917 年に発表した「未来派ダンス宣言」では、明白に「モーターによって増強された肉体」を舞踊の中に導入すること、「機械との融合」を準備することを主張しているのである。また、未来派同人のフォルトゥナート・デペーロは、1914 年に発表した宣言「造形的複合体－未来派自由遊戯－人工的生命体」において、「最も先進的な人間の発見」として「自動的に叫び、踊り、喜劇的に変形する人工的生命体」を想像し、ジャコモ・バッラは、1917 年ディアギレフ率いるバレエ・リュスによるストラヴィンスキーの『花火』の公演の際に、バレリーナの身体の代わりに「幾何学的な形態の透明な物質」を舞台上に置く。そして、エンリコ・プランポーニも、演劇における俳優の身体的介在を愚かな妥協であるとして、舞台空間の気そのものによって成立する演劇のヴィジョンを示唆するのである。さらに、戯曲の主題として機械化された人間の姿を執拗に描いたのがルジューロ・ヴァザーリであった。

こうした主張や実践から、舞台芸術における新たな身体性の在り方として、未来派は 2 つのアプローチをとっていたと仮説を立てることができた。それは、人間が持つ身体的特性の限界の認識から身体性不在の革新的な芸術を志向する「抽象化」と、感覚や身体機能の限界値を極限まで拡張しようとする「機械化」である。この仮説が本研究課題の出発点となった。

2. 研究の目的

本研究の目的は、主に 1910-20 年代のイタリアにおける未来派舞台芸術を対象に、そのテキストや上演実践の綿密な分析から上記の仮説を検証したうえで、抽象化・機械化という舞台芸術における新しい身体性の在り方が同時代において持ち得た意味や、それ以降の演劇に与えた具体的な影響を解明することであった。とりわけ、本研究の主たる目的となったのは以下の 3 点であった。

- (1) 未来派演劇における身体表象の「機械化」が持ち得た時代的意味とその射程を解明すること。
- (2) 未来派演劇における身体表象の「抽象化」が持ち得た時代的意味とその射程を解明すること。
- (3) 上記の身体表象の「機械化・抽象化」の観点から、未来派演劇を当時の歴史的前衛ひいてはヨーロッパ演劇史の中に位置づけること。

3. 研究の方法

(1) イタリア各地に分散する書簡や手稿といった一次資料や先行研究から、未来派の舞台芸術に関する諸宣言や理論的著作を再検討し、身体表象の在り方に関連する未来派の思想を再構築して学術誌の論文や書籍の一章として発表した。その際に、原典紹介がなされていないものに関しては、できる限り翻訳公開に努めた。

(2) 現地調査に関しては、ローマ国立中央図書館をはじめ、ローマ大学近現代史学科図書館の舞台芸術セクション「ジョヴァンニ・マッキア」、未来派関連雑誌の約 95%が収集されている「エチャウレン・サラリス」財団資料館、ロヴェレート近現代美術館のアーカイブ、パレルモ大学図

書館などで各施設の学芸員やイタリアの研究者との意見交換も交えながら進めた。
(3) 成果の発表とさらなる研究の展開の場として、国内の研究者をはじめ、フランスやアメリカの大学に所属するイタリア人研究者を招聘して国際シンポジウムを開催した。

4. 研究成果

(1) 未来派演劇における機械化された身体表象の背景や意味の解明

未来派運動の黎明期において、創始者マリネッティは機械文明に適した人間の在り方として、モーター化あるいは金属化した身体への移行を提唱していた。この思想の背景には、ニーチェやダンヌンツィオの超人思想の影響もあったことは確かであるが、それ以上に自らもまた古い感性を持ち、旧来の自然—女性に従属する人間であることを認めまいとする、機械文明の時代における未来派同人の不安や苦悩が現れていることを指摘した。未来派としての出発点である「創立宣言」のうちに、近代のリズムに適応する再生後の身体表象として、工場で生まれ、生産工程で排出される金属の浮滓が溶けた泥土で育つ人間の姿がすでに予告されていたことを指摘することから出発し、近代性に直面したときのマリネッティの当惑や機械的な身体表象に対する敵意を読み解くことで、声高に謳われた近代崇拜や機械化された身体への提案に潜在する心理的背景として、時代への不適応感や自らの感性を新しい時代に調和させたいという願望を明らかにした。さらに、マリネッティが志向する「増強された人間」が、交換可能な身体のパーツを備え、機械と共通の言葉を話し、機械化された思考を持つ身体表象への変容であったことを検証するとともに、その変容における意志の決定的な役割を指摘した。そして最後に、その意志が外在化され、目に見えない身体表象として機械化された身体に加わることで、世界の相貌を更新し未来派的なエデンを永続させるための超人を無性生殖で生むことが可能になるというマリネッティの思想を詳らかにした。

(論文)「マリネッティにおける機械化された身体」

(『言語文化研究』第48号(大阪大学大学院言語文化研究科)2022年3月31日)

(2) 未来派演劇の代表的な劇作法である「総合演劇」における身体表象の検証

未来派演劇において最も革新的な劇作法が具現化された総合演劇における身体性を検証するために〈未来派総合演劇宣言〉に焦点を当て、宣言の全文を学術雑誌に翻訳した上で、宣言文に示された劇作法やそこにおける身体性が、実際の戯曲やその上演実践においてどの程度実現されているのかを学術論文において綿密に検証した。

「総合演劇」の提案は、それまでに未来派が文学や美術において探求していたダイナミズムや同時性の表現を演劇の分野に翻案したものであった。文学における自由語の類推的・視覚的なメカニズムが無論理的で驚きを惹起するプロットに移され、時間と空間の相互連関的な変化相を同一画面に同時に表現しようとした絵画における同時主義が、相互浸透の劇作法に適用された。だが、演劇におけるこうした試みは、その直観的着想が芸術表現として完成にまで到達しなかった。適切な設備の不足や技術面での課題が、テキストにおいては実現できた「総合」を上演において妨げたのである。また、戯曲テキストに限定しても、それは〈総合演劇宣言〉が謳っていた革新性に到達していたとは言えない。近代演劇の冗長な技法を否定し、短さを基底にして提出した相互浸透や同時性、物体のドラマの劇作法は、驚嘆を媒介に観客の当事者性を喚起したという点では、ある程度アヴァンギャルドの相貌を備えていたと言える。だが一方で、それらの劇作法を通して表現することを意図した「感覚の総合」という概念は、前近代的な象徴主義の影響を完全に逃れるものではなかった。未来派の総合演劇は、前衛とモダニティをめぐる認識の揺らぎのうちに提出されたこともあり、同時代の歴史的な前衛や第二次大戦後の不条理演劇、リヴィングシアターなどへの影響にもかかわらず、西洋演劇史においては周辺に位置づけられている。

(論文)「〈未来派総合演劇宣言〉を読む ―戯曲における実践の検証を通して―」

(『立命館言語文化研究』第34号3巻(立命館大学国際言語文化研究所)2023年3月25日)

(翻訳)「未来派総合演劇(無技巧的—躍動的—同時的—自律的—無論理的—非現実的)1915年1月11日—1915年2月18日」

(『立命館言語文化研究』第34号3巻(立命館大学国際言語文化研究所)2023年3月25日)

(3) 未来派における身体表象の機械化・抽象化と同時代の主観／客観の認識との相関の指摘

未来派演劇において最も革新的な劇作法が具現化された総合演劇に、さらに抒情性と主観性を補完することになったピーノ・マスナータの「視覚化演劇」のマニフェストと実作品を取り上げ、そこにおいて総合演劇とは異なる形で時間の同時性や空間の浸透が表象されたことで、総合演劇に新たな展開を促すことになったことを、国際シンポジウムにおける口頭発表および学術誌におけるイタリア語論文で論証した。

マスナータの「視覚化演劇」は、フラッシュバックや意識の流れ、現実の空間と想像の空間の相互浸透といった時間的・空間的な操作によって主人公の主観と心理を強調することで特徴づけられていた。こうした劇作法が導入されたことにより、未来派の「総合演劇」は1920年代において変革を遂げることになる。「総合演劇」は当初、簡潔さや技法の否定、観客に驚愕を惹起する効果に重点を置いていたが、「視覚化演劇」の影響によって、より心理的で深みのあるアプローチを追求するようになった。この進化はとりわけマリネッティの1920年代の戯曲作品に顕著であり、「連鎖的シンテジ」のような劇作法においては、マスナータの理論に触発されて、連続的で奥行きを伴った時間軸やプロットを導入している。さらに、「視覚化演劇」の基本的要素である色彩の使用も、「総合演劇」における単純な驚愕の効果や視覚的ダイナミズムを超えて、登場人物の心理状態をニュアンス豊かに表象するための劇作法として補完されていることを指摘した。身体性の抽象化・機械化の意味に関しては、同時代の主観と客観の認識をめぐる問題に還元できるだろうという仮説にまで辿り着いた。

(論文) Il Teatro Visionico di Pino Masnata e il suo contributo al Teatro sintetico

(*Studi di lingua e letteratura*, Dipartimento di italianistica della Facoltà di Lettere dell'Università di Kyoto. febbraio 2024)

(4) 日本における未来派受容とその影響の解明

学術書の一章において、森鷗外から始まる日本における未来派受容の黎明期の状況を紹介した。

(図書)『イタリアの文化と日本 日本におけるイタリア学の歴史』(第三章 ファシズム期と戦後) (松籟社、2023年2月28日)

(5) 未来派演劇における抽象化された身体表象に関する予備研究

研究期間中にミラノやロヴェレートの図書館やアーカイブを訪れ、「造形演劇」を提唱した舞台装飾家フォルトゥナート・デペーロや舞台装置に造形性や躍動的な色彩の導入を主張したエンリコ・プランポリーニの一時資料を中心に収集・整理をおこなうことができた。やはり研究期間中に資料の整理を行い、その思想を整理していたジャコモ・バッラのバレエのための舞台美術やイーヴォ・パンナッジとヴィニーチョ・パラディーニによる「バレエメカニック」も含めた舞台芸術における抽象的な身体表象についての論考を執筆するための予備研究を進めた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 4件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 菊池正和	4. 巻 34(3)
2. 論文標題 未来派総合演劇宣言 読む 一戯曲における実践の検証を通して一	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 立命館『言語文化研究』	6. 最初と最後の頁 39-56
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.34382/0002000289	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 菊池正和	4. 巻 34(3)
2. 論文標題 （翻訳）未来派総合演劇（無技巧の一躍動的一同時的一自律的一無論理的一非現実的）1915年1月11日－1915年2月18日	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 立命館『言語文化研究』	6. 最初と最後の頁 57-62
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.34382/0002000288	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 菊池正和	4. 巻 48
2. 論文標題 マリネッティにおける機械化された身体	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『言語文化研究』	6. 最初と最後の頁 39-58
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18910/87085	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Masakazu Kikuchi	4. 巻 2
2. 論文標題 Il teatro visionico di Pino Masnata e il suo contributo al teatro sintetico	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 Studi di lingua e letteratura del dipartimento di italianistica dell'Universit� di Kyoto	6. 最初と最後の頁 15-37
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 0件）

1．発表者名 菊池正和
2．発表標題 未来派総合演劇宣言 を読む―戯曲における実践の検証を通して―
3．学会等名 立命館大学「国際言語文化研究所重点プロジェクトA1-4」（招待講演）
4．発表年 2022年

〔図書〕 計1件

1．著者名 ジョヴァンニ・デサンティス、土肥秀行（編）	4．発行年 2023年
2．出版社 松籟社	5．総ページ数 340
3．書名 イタリアの文化と日本 日本におけるイタリア学の歴史	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6．研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	土肥 秀行 (Doi Hideyuki)		
研究協力者	石田 聖子 (Ishida Satoko)		
研究協力者	池野 絢子 (Ikeno Ayako)		

6．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	巖谷 睦月 (Iwaya Mutsuki)		
研究協力者	太田 岳人 (Ota Taketo)		
研究協力者	横田 さやか (Yokota Sayaka)		
研究協力者	角田 かるあ (Tsunoda Karua)		

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計1件

国際研究集会 イタリアにおけるモダンとアヴァンギャルドの相克3－未来派の宣言文を読む	開催年 2023年～2023年
---	--------------------

8．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------